黒船

吉村 昭

黒船

吉村昭

江苏工业学院图书馆
藏书章

中央公論社

黒船

©一九九一　検印廃止

一九九一年九月二〇日初版発行
一九九一年一〇月二五日四版発行

著者　吉村　昭

発行者　嶋中鵬二

印刷所　三晃印刷

製本所　大口製本

発行所　中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替　東京二-三四

ISBN4-12-002042-8　Printed in Japan

黒

船

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

嘉永六年（一八五三）六月三日――

梅雨の季節もすぎ、江戸湾の湾口に突き出た三浦半島をおおう樹木の緑は、日を追って濃さを増していた。

朝のうちは曇天であったが、次第に青空がひろがった。雲がかかっていた富士山もくっきりとみえ、眩ゆい陽光が海上を明るく輝かせていた。

半島の突端にある城ヶ島では、朝から四人の男が岩礁で鮑（あわび）とりをつづけていた。赤い褌（ふんどし）をつけたかれらは、腰のあたりまで海に踏みこんで水に顔を突き入れ、時にはもぐったりして、岩にはりつく鮑を掻きとっていた。その附近には海草類が繁茂していて上質の鮑がとれ、それらは江戸に送られて料理屋などに引取られる。

水は冷たくなかったが、それでもかれらは、時折、磯にあがって体を暖め、一服する。背後の傾斜地の樹林には、蟬の啼声がしきりであった。

八ツ（午後二時）頃、鮑をとっていた一人の男が、かすかな物音を耳にして顔をあげた。それは磯に寄せる波の音とも蟬の啼声ともちがう、耳にしたことのない重々しい音であった。

海の方向に顔をむけたかれの体は動かなくなり、眼が大きく開かれた。かれは立ちすくみ、口から悲鳴に似た叫び声がもれた。その声にほかの男たちは腰をのばし、かれの視線の方向に眼をむけた。

西南の方角の海上を黒々とした驚くほどの巨大な船が、三本の帆柱を立てた船をひいて進んでくる。その後方にも、同じように帆船をひいたいかめしい船がつづいていた。

帆船を曳航する二隻の巨船の両側には、大きな水車のような黒い車輪がついている。奇妙な音は、その車輪が水しぶきを散らしながら回転する音であった。

その姿が怪物のように思え、異国船であるのに気づいた男たちは、おびえきった叫び声をあげて競い合うように岸にあがり、よろめきがちに詰所の方向に走った。

それが、江戸湾口で最初に異国船を近々と眼にした者たちであったが、その日の夜明け前にそれらの船が伊豆半島沖を通過するのを目撃した者がいた。それは半島の突端にある下田の漁師で、下田港の五里沖に舟を出して夜の漁をしている時、異様な音を耳にしたのである。

空は一面の星で、漁師は、音が近づいてくるその方向に視線をこらし、星明りに大きな船が四隻つらなって進んでくるのをみた。二隻の船の舷側には海水を散らしながら回転する大きな車がついていて、船は南東の方向に遠ざかっていった。かれは驚いて下田の港に舟をもどし、上陸すると詰所に走った。

これにつづいて、相模湾に舟を出していた漁師の与八、久次郎、吉平の三名も、大船が進んでゆくのを目撃し、下田の役人に通報した。

下田では、ただちに役人が物見舟を出したが、異国船の姿をみることはできなかった。

江戸湾口で鮑とりをしていた者たちが詰所に走った頃、三浦岬にもうけられていた見張番所でもそれらの船を発見、異国船現わるの合図の狼煙(のろし)をあげ、三崎詰所から浦賀奉行所に急報した。

四隻の黒い大船は、淡い靄のただよう海上を東にむかって進んでゆく。

それぞれ帆船をひく二隻の船は、過去に目撃された異国船とはちがった形態をしていた。高い帆柱が三本立っているのはそれまでの異国船と同じであったが、中央に黒々とした煙突が突き立っていて、そこから黒煙が吐き出されている。車輪は煙突の下方の舷側にとりつけられていて、水を泡立てながら回転している。

それらの二隻の船がひく帆船は、帆がすべておろされていて、車輪つきの船にひかれて動いていることをしめしていた。

四隻の異国船は、剣崎の東南方で舳(へさき)を左にむけ、北へ進みはじめた。

江戸湾の警備を担当していた彦根、会津、忍(おし)、川越の四藩の見張番も、それぞれ剣崎をまわって浦賀水道に入る大船を確認した。

まず、彦根藩の山下藤兵衛が城ヶ島沖を航進する異国船発見を浦賀奉行所に注進したのにつづいて、同藩の羽田六兵衛が、浦賀水道に面した彦根藩の上宮田(かみみやた)陣屋の沖合を北上している、と報告した。

その地域を防備している彦根藩では、ただちに海岸の陣屋に藩兵を配置すると同時に、多くの軍船を海に出すよう指令した。

あわただしく水主が集められ、藩兵たちが軍船に乗って北へむかう異国船を追った。

また、海上に舟を出して漁をしていた対岸の安房国（千葉県）の漁師たちも、四隻の異様な大船を眼にして驚き、急いで陸岸に引返して陣屋に走った。房総半島の警備を担当していた各藩では、見張番からの注進を得て藩兵を繰出し、富津（ふっつ）、北条、竹ヶ岡などの陣屋をかためた。また、藩兵を乗せた軍船も出され、これらも異国船を追った。

波はおだやかであったので、湾内には出漁した舟が浮んでいたが、黒船の出現で、それらの漁船は、あわただしく陸岸にむかって散り、また、荷船の姿もみえなくなった。

海上にかかっていた靄が消え、眩ゆい陽光がひろがっていた。三浦半島の緑につつまれた丘陵の後方には美しい富士山がみえていた。

四隻の黒船は進み、それにむかって各陣屋の小舟が群がって追っていた。丘陵からは狼煙があがり、海岸には防備の各藩の藩兵のあわただしい動きがみられた。

黒船は久里浜沖をすぎ、さらに北上してゆく。

そのうちに、車輪のついた船に曳航されていた帆船に帆があがり、同時に曳航綱が解かれた。帆がふくれ、帆船は自力航走をはじめた。微風ながら、風は南方向から吹いていて順風になったのだ。

黒船は浦賀沖をすぎ、徐々に速度をゆるめて観音崎の手前の鴨居沖で動きをとめた。七ツ（午

後四時）すぎであった。

船は陸岸にむかって横一線に並んで錨を投げた。船に装備された砲で、陸の砲台と対決する陣形を組んだことはあきらかだった。

三崎詰所から追ってきた浦賀奉行所与力松村源八郎の舟が、黒船に近づいていった。その後方に各藩の舟が群がってつづき、その数は百艘ほどにも達していた。

異国船側の記録によると、

「それ等の船は白木造りで舳は非常に鋭く、船幅は広く、次第にほつそりとなつて艫がついて居り、その船足は軽快であつた。

これ等の船は非常な速さで、水の中をと云ふよりは寧ろ水の上を航進してゐた。何故ならば水を分けてといふよりは寧ろ海面を滑つてゐるやうに見えたからであつた。

比較的大きな船には三十人以上もの人が乗組んでゐた。水夫達は身長の高い筋肉の隆々とした男達で、その赤銅色の肉体には腰の周りに一片の布（註―褌）をつけてゐるきりで、あとは全部裸であつた。

……或る船には、十字形の飾物を頂端につけた長い竿を持つてゐる者があつた。その竿は或る軍職の者のゐるしるしらしかつた。

役人達は漆塗りの軽い帽子（註―陣笠）を被り、帽子の前額の所には紋章が附いてゐた。この紋章は多分官職位階を示すものであらう。

漕手は櫓の側に立ち、その櫓は艫の近くの舷側についてゐる軸の上で動くやうになつてゐる。

彼等はこの櫓を実に巧みに且的確に操るので、非常に速く艦隊へ近づいて来たのであつて、彼等は大声で掛声をかけながら漕ぎ寄せて来た」（『ペルリ提督日本遠征記』土屋喬雄・玉城肇訳）

と、記されている。

鎖国を守りつづけてきた日本にとって、異国船は、突然、姿を現わす闖入者であるが、眼前に航進する異国船は、それまで眼にしたものとはちがっていた。異様な車輪をもつ船をふくむ四隻の編成で、役人や藩兵、水主たちは、恐怖を感じながらも大胆にそれを追ったのだ。

小舟の群は、接近すると、四隻の異国船をかたく包囲した。

車輪つきの異国船に与力の松村源八郎の舟が近づき、かれは鉤のついた麻縄を水主に投げさせた。役目上、異国船に乗りこんで検分する必要があった。

縄が投げられたが、それははずれて海面に落ち、再び投げ上げられた。甲板には異国人たちが駈け集まってきて、こちらを見おろしている。

今度は鉤が船の上部構造にかかったらしく、縄が強く張られた。それに気づいた異国人の一人が、サーベルを抜いて縄を切り払った。

さらに水主が他の縄を投げようとすると、甲板上に集まった異国人たちが一斉に銃に着剣し、銃口をこちらにむけ、また、上官らしい者たちも短銃を手に射つかまえをした。

殺気がみち、危険を感じた松村は、船頭に引返すよう命じた。舟は異国船をはなれ、包囲する舟の群の中にもどった。

異国船が浦賀水道に入った頃、浦賀奉行戸田伊豆守は、久里浜海岸にいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

異国船の出没がしきりになってから、幕府は江戸湾の防備に力を注ぎ、物見櫓を増設し、砲台の築造もおこなった。西洋式の銃砲術を採入れる必要も感じて、天保十二年（一八四一）には、オランダ人から砲術をまなんだ高島秋帆を江戸に招き、徳丸原（板橋区）で大砲四門、小銃五十挺による試射をおこなわせた。その折に、下曽根金三郎が幕府の鉄砲方として立ち会った。金三郎は、長崎奉行、江戸町奉行を歴任した幕府の重臣筒井政憲の次男で、江川坦庵（太郎左衛門）についで高島流砲術指南となり、江戸湾防備のため浦賀奉行管下の者たちに大砲、銃の操作を繰返し教えていた。

その日も、金三郎の指導で大砲の発射稽古が久里浜海岸でおこなわれ、奉行の戸田は、奉行所の与力、同心たちが伝授をうけるのを視察していた。

そこに、城ヶ島沖に四隻の異国船現わるの急報をうけた奉行は、ただちに稽古中止を命じ、与力、同心をしたがえて奉行所のある浦賀へ急いで引返した。その途中、車輪を廻して進む二隻の黒船がそれぞれ大型帆船をひいて北上するのを眼にし、容易ならざる事件であるのを感じた。

奉行一行が奉行所についた時、すでに異国船は、浦賀東北方の海上に投錨していた。

奉行所からは早くも物見の舟が出ていたが、それが引返してきて、奉行に異国船についてのかなり詳細な報告をした。

まず、異国船四隻のうち二隻は蒸気船、二隻は大型帆船であること。その蒸気船の船体の長さは、二隻ともおよそ三十二間（一間は約二メートル）。その一隻はすべて鉄張りで、七、八間ぐらいの長さの大型ボートが二艘、五、六間ほどの長さのボートを六艘乗せている。大砲が上、中段

に計二十門そなえつけられ、砲身は黒く、真鍮の蓋がついている。船の両側にとりつけられている「水掻き車」は鉄でつくられているらしく、直径約四間、厚さ二間ほどで、大きな鋲でとめられている。乗組員は、四隻ともおよそ三百人ぐらいと推定される。

物見舟に乗っていた与力は、さらに「水掻き車」の動きについても報告した。

異国船に近づいたところ、船上の者がしきりに手招きするので二間ほどの距離まで近寄った。異国人が「水掻き車」を指さすので、車をみていると、突然、それが回転して船が動き出した。回転は驚くほど速く、船は三十間近く進んで停止し、今度は後ずさりして元の位置にもどった。逆進する折の車輪の動きはゆるやかであった。他の蒸気船は木製で、美麗なところからこの船に高官が乗っているものと推察される。この船にも大砲十門その他三門が認められた。二隻の帆船は、長さ三十二、三間で、これにも大砲がそなえつけられているという。

以上の報告で、奉行は十分に武装された軍艦であることを知った。

浦賀奉行は二人いて、戸田伊豆守は浦賀に詰め、井戸鉄太郎は幕府との連絡役として江戸にとどまっていた。

戸田は、ただちに異国船四隻の出現とそれらの船が浦賀東北方の海上に投錨した第一報を、江戸の井戸宛につたえるため早舟を出した。また、警備の四藩に備えをかためるよう依頼し、奉行所の受持ちの台場に警備の者を急いで繰出させた。

異国船が来航した折には、なるべく早く役人を派遣して、船の国籍、来航の目的をただし、それとともにその規模をつかむことが義務づけられていた。

奉行は、その役目を支配組月番与力の中島三郎助に命じ、近藤良次と、それに佐々倉桐太郎を加えた。七年前の弘化三年五月、海軍准将ジェームス・ビッドル指揮のアメリカ軍艦「コロンブス号」「ヴィンセンス号」が浦賀に来航した時、当時十七歳の佐々倉が交渉にあたったが、若年とは思えぬ豪胆さで退去させることに成功したので、特に選ばれたのである。

小通詞並の堀達之助は、奉行所内の通詞部屋で指令がくだるのを待っていた。

オランダ通詞は、長崎にいてオランダ商館との間の通訳、オランダ書の和訳と日本文のオランダ訳を仕事としていた。

しかし、異国船の出没がしきりになってからは江戸に出張を命じられて、そのまま在勤する者もいた。それは、文政六年（一八二三）に吉雄忠次郎が江戸詰になったのが最初で、堀達之助は七年前の弘化三年に長崎を立って江戸につき、嘉永二年（一八四九）まで在勤して長崎へ帰った。江戸滞在中は、天文方に勤務して洋書の翻訳に従事し、異国船渡来にそなえて浦賀に出張することも義務づけられていた。かれは、前年に再び江戸へくると浦賀詰となり、江戸には同じ小通詞の立石得十郎が在勤していた。

達之助は、異国船四隻現わるの報に、役宅から奉行所に駈けつけた。当然、異国船との折衝に立ち会わねばならない。

奉行所内は騒然とし、甲高い声が飛び交っていた。異国船を、これまで姿をみせることの多かったイギリス船であると考えているらしく、

「エゲレス舟」

という声がしきりであった。

しかし、達之助は、アメリカ船にちがいないと考え、四隻という編成からもそれは確実だ、と思った。

かれは、前年に長崎経由で江戸にオランダ国王の公文書が届けられたことを思い起していた。その年の六月五日、長崎にオランダ船が入港したが、その船には新任の商館長として赴任するヤン・ヘンドリック・ドンケル・クルチウスが乗っていた。かれは、国王の命令による蘭領東インド総督の公文書を携帯していて、長崎奉行牧志摩守に提出し、その公文書には日本にとって重大な事柄が記されているので幕府につたえて欲しい、と懇請した。オランダ国王は、弘化元年（一八四四）にも国書を送ってきて、そこには開国を強く説く内容が記されていたが、その公文書にも同様のことが記されていると想像された。

奉行は一存ではきめかね、クルチウスの要請書を年番大通詞の西吉兵衛と年番小通詞の森山栄之助に和訳させ、江戸に送った。

老中首座阿部正弘は、老中たちと協議し、要請書だけではなく、オランダの公文書も江戸に送るよう命じた。

その命令をうけた長崎奉行は、クルチウスに公文書を提出させ、機密文書として西と森山に和訳を指示した。二人は、表紙に「御内密」と記し、翻訳の筆を進めた。

冒頭に、アメリカが軍艦を日本に派遣して通商を要求するという説が、ヨーロッパ一帯に流れ

ていることをおつたえする、と書かれていた。

それにつづいて、アメリカは強大国で、日本に派遣される軍艦は数隻で、その中には蒸気艦もふくまれ、強圧的な行動に出るか、またはおだやかな態度をとるかは不明であること。世界情勢からみて、日本のみが鎖国政策をとるのは孤立化することであり、他国との接触を拒めば必ず紛争が起り、その折には武力行使による戦争となるのはまぬがれない、と述べられていた。また、新任の商館長クルチウスには国王の内意がつたえられているので、クルチウスからさらに詳しく事情をきいて欲しい、と記されていた。

幕府は、近々アメリカ艦隊が来航するというオランダ国王の通報に驚いたが、それに附随してオランダから送られてきた世界情勢をつたえる風説（情報）書の内容に、それが確定したものであるのを知った。これも西、森山両通詞の和訳によるものであった。

そこには、日本にむかう艦隊についての内容が箇条書にされていた。

一、アメリカ使節の目的は、日本との通商を開くことにあり、アメリカ大統領より日本国王への親書が携帯されている。使節は、通商に必要な日本の二、三ヵ所の港の開港と、それ以外の港にカルホルニアと中国との間を往来する汽船の石炭貯蔵所の設置を要求すること。

一、使節は、大統領から江戸におもむくよう命じられていること。

一、使節はアウリッキ（オーリック）であったがヘリイ（ペリー）に交替し、すでに中国に来ている蒸気艦一隻、帆走艦三隻、さらにアメリカ本国から数隻の蒸気艦をひきいて日本にむかう由。

一、艦隊には陸戦隊員も乗っていて、それが使用する兵器等も積み入れられているらしいこと。

という具体的なことが記されていた。

衝撃をうけた幕府は、国王の内意をうけているという商館長クルチウスの説明もききたいと考え、長崎奉行に書面で提出させるよう命じた。

やがて、クルチウスの書面が和訳されて送られてきたが、それは、外国と通商条約を結ぶ折の条約下書で、概略左のことが箇条書で記されていた。

一、通商は、長崎港にかぎること。

一、通商許可をあたえた国の高官を長崎に常駐させ、住居も用意すること。

一、交易は江戸、京、大坂、堺、長崎の商人にかぎること。

一、国法を犯した外国人は、長崎奉行所から外国高官に引渡し、その国の法律で裁かせること。

一、外国汽船のための石炭貯蔵所をもうけること。

老中たちは、通商条約の案文までしめされたことに愕然とした。

しかし、通商はオランダ、中国の二国にかぎられ、それは幕府の基本政策であるので、他国との通商条約の締結は絶対に受けいれられぬことであった。当面の問題として、近々、アメリカ艦隊が来航することは重大で、協議を繰返したが、それが事実であるかどうか疑問視する老中もいた。老中たちは、一応アメリカ艦隊が来航することを想定し、浦賀奉行にオランダからの報告をひそかにつたえ、防備を厳にするよう命じた。

堀達之助は、奉行からオランダの風説書について質問をうけ、それが十分に信用できるもので

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com